

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年5月24日現在

機関番号：10101

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2010～2012

課題番号：22520381

研究課題名（和文） ロマンズ語における冠詞の対照研究

研究課題名（英文） Contrastive study of articles in Romance languages

研究代表者

藤田 健 (FUJITA TAKESHI)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50292074

研究成果の概要（和文）：本研究は、ロマンス諸語に属するフランス語・スペイン語・イタリア語の三言語において、その名詞句構造において中心的な位置を占める冠詞の体系について総合的な分析を行った。不定冠詞については、各言語における分布を詳細に検討し、三言語における共通性と相違点を明らかにした。定冠詞については、特に代名詞的機能について対照分析を行った。フランス語とイタリア語に見られる部分冠詞については、両言語の相違点を明示した。

研究成果の概要（英文）：In this study we made a synthetic analysis of the system of articles, which play a principal role in the noun phrase structures in French, Spanish and Italian. The detailed distributional observation of the indefinite article enabled us to show several points in common and differences in its system in these three languages. The pronominal function of the definite article was analysed from contrastive points of view. The analysis of the partitive article, which is observed in French and Italian, elucidated some differences in its system in the two languages.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	600,000	180,000	780,000
2011年度	600,000	180,000	780,000
2012年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総計	1,800,000	540,000	2,340,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学

キーワード：フランス語、スペイン語、イタリア語、冠詞

1. 研究開始当初の背景

冠詞という言語形式は、西ヨーロッパの諸言語において極めて重要な位置を占める要素で、従来様々な観点から研究が進められてきた。ロマンス諸語は極めて精緻な冠詞体系を有することを特徴としているが、言語ごとにその体系が異なっている。本研究が対象とするフランス語・スペイン語・イタリア語についても、それぞれの言語において個別に研

究が行われている。しかし、これら三言語について、具体的なデータに基づいた包括的な対照研究はあまり進んでおらず、表面的な側面でしかその相違点が明らかにされてこなかったと言える。冠詞には様々な機能が付与されていることから、その本質を明らかにするには、何よりも数多くの用例を観察しそれに基づいた総合的考察が不可欠である。このような視点は従来のロマンス語における冠

詞研究において欠如していると言わざるを得ない状況にあった。

2. 研究の目的

フランス語・スペイン語・イタリア語における冠詞の機能的体系を明らかにすることが目的である。定冠詞・不定冠詞・部分冠詞のそれぞれの機能がどのように分配されているかを考察する。その際に、従来の研究では必ずしも意識されていなかった無冠詞の機能を考慮に入れ、無冠詞を冠詞体系の中に位置づけることによって、各言語の冠詞体系の共通点と相違点を明示する。

3. 研究の方法

それぞれの言語の文学作品をコーパスとし、原典と翻訳を対照して冠詞の対応を詳細に観察し、その分布を提示する。それをもとに、それぞれの言語の冠詞のもつ機能と、異なる冠詞の間の機能的配分を明らかにする。機能を考察する上で、形式との関係でどのように特徴づけられるかが問題となってくる。その際に、特定の理論的枠組のみに依存した分析では、冠詞という複雑な言語現象の本質をとらえることは難しい。本研究では、生成文法や機能文法といった統語論や形態音韻論による幅広い視点から、冠詞という要素に関する理論的な特徴づけも行う。

4. 研究成果

本研究では、不定冠詞、定冠詞、部分冠詞のそれぞれについて研究成果が得られた。以下に順次概要を述べる。

(1) 不定冠詞

不定冠詞については、フランス語とスペイン語、フランス語とイタリア語、スペイン語とイタリア語に分けて対照分析を行った。それぞれの言語のテキストにおいて、不定冠詞が生起する例について、対応する他言語のテキストにおいてどのような形式が用いられているかを調査し、その分布をもとに各言語の不定冠詞と他の冠詞が機能面に関してどのような関係にあるかを示した。

① フランス語とスペイン語

分析の結果明らかになった共通点は以下のとおりである。

- i) 文法機能ごとの不定冠詞の分布について、大きな差異は観察されない。
- ii) 不定冠詞と部分冠詞との機能の分化はかなり明瞭である。
- iii) 不定冠詞と定冠詞の機能は必ずしも相反するものではなく、両者の関係は連続的なスケールでとらえられるものである。

特に興味深いのは iii であるが、これを示すのは以下の例である。同じ統語的文脈において、フランス語では不定冠詞が生起するのに対し、スペイン語では定冠詞が用いられて

いる。

フランス語

Le ministre prit dans un tiroir de son bureau une boîte de caramels mous.
キャラメルを箱を

スペイン語

El ministro sacó del cajón de su mesa una caja de caramelos.

これに対して、相違点は以下のとおりである。

- i) フランス語においては無冠詞のもつ機能はかなり制約されており、語彙的に決定されるものが多い。
- ii) スペイン語においては無冠詞が非連続的な要素を指す単数の不定の名詞句を導く機能も担う。

i を示すのは、形容詞によって修飾された連続的な要素を指示する名詞句において、フランス語では不定冠詞が現れ、スペイン語では無冠詞が用いられている以下の例である。

フランス語

Au repos, l' expression de Valérie était
休憩している時 ヴァレリーの表情は
d' une tristesse tendre, ...
やさしい悲しさを含んでいた

スペイン語

Durante el descanso, la expresión de Valeria era de tristeza tierna, ..

ii を示すのは以下の例である。非連続的な要素を指示する名詞句とともに、フランス語において不定冠詞が現れ、スペイン語では無冠詞が現れている。

フランス語

Pour vous en donner une idée, ...
皆さんがご想像できるように

スペイン語

Y para que se hagan idea vuestras mercedes, ...

フランス語において不定冠詞が現れる名詞句にスペイン語で無冠詞が対応している名詞句の割合が全体の 10.7% であるのに対し、スペイン語において不定冠詞が現れる名詞句にフランス語で無冠詞が対応している名詞句の割合は 3.3% に過ぎない。このことは、スペイン語の冠詞体系における無冠詞の重要性を表している。

② フランス語とイタリア語

両言語における共通点は、①で示したものと同一である。相違点として挙げられるのは以下の点である。

i) イタリア語では、無冠詞が決定詞としての文法的機能を担うのに対し、フランス語においては無冠詞のもつ機能がかなり制約されており、語彙的に決定されるものが多い。

ii) イタリア語においては部分冠詞と不定冠詞の連続性はほとんど見られないのに対し、フランス語においてはその連続性が若干観察される。これは、イタリア語においては部分冠詞の使用が義務的ではないことに起因すると考えられる。

i を示すのは、フランス語において不定冠詞が生起するのに対し、イタリア語では無冠詞が用いられている以下の例である。

フランス語

Nous en avons un urgent besoin.
我々はそれが緊急に必要だ。

イタリア語

Ne abbiamo urgente bisogno.

フランス語において不定冠詞が現れる名詞句にイタリア語で無冠詞が対応している名詞句の割合が全体の 6.0%であるのに対し、イタリア語において不定冠詞が現れる名詞句にフランス語で無冠詞が対応している名詞句の割合は 4.4%となっている。それ程大きな差ではないが、イタリア語の方が無冠詞の使用の幅が広がっている。

ii を示すのは、イタリア語において不定冠詞が生起するのに対し、フランス語では部分冠詞が用いられている以下の例である。このような例は全体の 1.1%を占める。これに対して、逆の対応を示す例は極めてまれで全体の 0.07%に過ぎない。

フランス語

Dans son poids, le corps trouvait encore
その重みの中に肉体はなおも見出していた
de la vie.

生命を

イタリア語

Il corpo trovava ancora una certa vita
nel suo peso.

③ スペイン語とイタリア語

両言語における共通点は、①で示したものと同一である。両言語間に特徴的な相違点として挙げられるのは、スペイン語では指示性の高い文法機能において無冠詞の生起が多く観察されるのに対し、イタリア語では比較的少ないという点である。スペイン語では無冠詞が不定冠詞の機能の一部を担っていると捉えることができる。これを示すのは、指示性の高い直接目的語名詞句において、スペイン語では無冠詞が用いられるのに対してイタリア語では不定冠詞が生起

する以下の例である。

スペイン語

Era el único de toda la familia que no sólo
彼は家族の中でただ一人
tenía gran número de ocupaciones, sino que
多くの仕事を持っているだけでなく
nada de lo que hacía era inútil.
することが全て無益ではなかった。

イタリア語

Era l' unico di tutta la famiglia che
avesse un gran numero d' occupazioni, non
solo, ma che nulla di quel che faceva era
inutile.

イタリア語において不定冠詞が現れる名詞句にスペイン語で無冠詞が対応している名詞句の割合が全体の 9.7%であるのに対し、スペイン語において不定冠詞が現れる名詞句にイタリア語で無冠詞が対応している名詞句の割合は 3.1%にとどまっている。このことから、イタリア語と比べてもスペイン語における無冠詞の重要性が際立っていると言える。

以上の考察から明らかになったのは、無冠詞の果たす役割がスペイン語において最も重要であるのに対して、フランス語では極めて限られているという点である。このことから、相対的にフランス語において冠詞体系全体における不定冠詞の重要性が高いのに対して、スペイン語では低く、イタリア語はその中間に位置づけられると言える。また、不定冠詞と定冠詞との関係については、三言語においてそれほど大きな差は見られないということも明らかになった。

(2) 定冠詞

三言語における定冠詞の代名詞機能について考察した。スペイン語の定冠詞の代名詞性が高いのに対し、フランス語・イタリア語のそれは低いことが観察される。

スペイン語

En vez de llevarte mi coche,
僕の手車ではなく
llévate el de Teresa.
テレサのに乗っていきなよ。

フランス語

*Les voitures de la police et les des
pompiers
警察の手車と消防士の手それ

イタリア語

*le chiese d' Oriente e la di Roma
東方教会とローマの手それ

この言語間の相違は、スペイン語においては

定冠詞の形態的自立性が高いのに対して、フランス語・イタリア語においては低いことに起因すると分析した。

スペイン語

- a. el estudiante b. el muchacho
学生 少年

フランス語

- a. l' étudiant b. le garçon
学生 少年

イタリア語

- a. l' attore b. il ragazzo
男優 少年

スペイン語では後続する要素の音によって定冠詞の形式が変化することはないのに対して、フランス語・イタリア語では後続音によって形式が変化する。つまり、フランス語とイタリア語の定冠詞は他の要素に依存する形で実現される。決定詞と異なり、代名詞とはそれ自体で指示対象をもつ独立した要素なので、形態的にも自立性が求められると考えられる。

ただし、定冠詞の形態的自立性が高いスペイン語においても、定冠詞が何の要素も伴わずに代名詞として生起することは不可能である。

*La vendrá enseguida.

それはすぐ来るだろう。

これは、定冠詞がアクセントをもたないという音韻的な特性に起因している。単独で生起するには音韻的に独立した要素としてアクセントを有することが求められるが、定冠詞はその条件を満たしていないのである。

(3) 部分冠詞

部分冠詞は、フランス語とイタリア語に観察される要素である(スペイン語にも部分冠詞というカテゴリーを設定することは可能であり、筆者は基本的にその立場に立っているが、ここでは議論の複雑化を避けるためにスペイン語は考慮の対象外としている)。本研究では、フランス語の伝統文法において不定冠詞複数形としてカテゴリー化されている要素を部分冠詞複数形として扱っている。

両言語における部分冠詞の機能は基本的な部分では共通していると言えるが、その分布には大きな違いが見られる。フランス語の部分冠詞は極めて広い範囲で生起するのに対して、イタリア語の部分冠詞はその生起がかなり限られるのである。これは、フランス語における部分冠詞がイタリア語において他の形式に対応する例が数多く見られることから明らかである。

フランス語

comme si d' immenses ombres fussent
まるで巨大な影が
venues parfois approfondir la nuit.
時々夜を深めに来たかのように

イタリア語

come se ombre immense
sopraggiungessero di tratto in tratto ad
incupire la notte.

この事実は、以下のようにとらえることができる。フランス語においては、部分冠詞が冠詞体系において重要な位置を占めている。これに対してイタリア語では、フランス語に比べて無冠詞の占める割合が高く、部分冠詞が冠詞体系においてそれ程重要な位置を占めていない。部分冠詞が生起してしかるべき場合に無冠詞が用いられる例が少なからず存在するという事は、部分冠詞が冠詞として確固たるステータスをもたず、量化詞的な性質をもっていることを意味している。

また、両言語において部分冠詞が他の冠詞と機能上連続性をもっているということも明らかになった。フランス語の部分冠詞がイタリア語において他の冠詞によって表現されている例、また逆にイタリア語の部分冠詞がフランス語において他の冠詞によって表現されている例が一定の割合で存在する。例えば、以下のようにフランス語の部分冠詞がイタリア語の定冠詞に対応している例や、イタリア語の部分冠詞がフランス語の不定冠詞に対応している例が見られる。

フランス語

Il y aurait, hélas ! des ensuite…
ああ、続きがあることだろう…

イタリア語

Purtroppo ci sarebbero stati i postumi…

イタリア語

Vivo da molti anni per degli ideali.
私は何年もの間理想のために生きている。

フランス語

Il y a bien des années que je vis
pour un idéal.

このことから、それぞれの冠詞の機能が完全に分離されているのではなく、重なり合う部分も含めて連続的に機能が配分されていると言える。

以上の分析から、三言語における冠詞の機能が異なる部分が少なからず存在することが示された。それは各言語の冠詞体系におけるそれぞれの冠詞の位置づけが異なることを意味する。

特に注目すべき結果としてあげられるのは、スペイン語の冠詞体系における無冠詞の

重要性である。この傾向は、スペイン語においては無冠詞をゼロ形態素として他の冠詞と同等に位置づけることによって説明できる。これに対してフランス語においては、無冠詞の重要性は低い。このため、フランス語の無冠詞はゼロ冠詞として冠詞体系に位置づけるのではなく、特定の文脈における冠詞の不在ととらえることが可能であろう。イタリア語においては、スペイン語ほどではないにせよ、無冠詞がフランス語の部分冠詞に対応する機能をもつと考えられるので、ゼロ冠詞としての位置づけが妥当であると思われる。

また、三言語に共通の特性として、不定冠詞と定冠詞の間に明瞭な境界線が設定できるとは限らないという点があげられる。一方の言語における不定冠詞に他言語において定冠詞が対応する、あるいはその逆の例が必ず観察される。これは、定と不定という概念的区別の難しさを示している。理論上は両者は明確に区別されるものであるが、実際の使用においては文脈に応じて揺れが生じることがあり得る。これは、文という単位では決してとらえることのできない問題であり、談話というより大きな単位において詳細に検討されるべきテーマである。本研究の成果によって、新たに組み込まねばならない問題がいくつか生じたが、その中でとりわけ重要なのは無冠詞そのものの詳細な分析である。また、他の冠詞に比べ、極めて使用頻度が高い定冠詞についての考察も更に進めていかねばならない。その際に留意すべきは、少なくとも冠詞を分析する上では、文単位で分析を進める統語論的枠組みはそれほど有効ではなく、談話単位でその分布を考察しなければ根本的な解明にはいたらないということである。

更に、アクセントをもたない要素であるという冠詞の性質上、形態音韻論的な視点が不可欠であることも示された。本研究は、今後冠詞の研究に求められる方法論について重要な示唆を与えるものである。個々の理論的枠組みの範囲内での研究ではこれ以上の進展は望めず、詳細なデータ収集に基づき複合的な視野で分析を進めることによってのみ、冠詞という極めて難解であるがそれと同時に魅力的な要素の本質に近づけると言えよう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計4件)

- ① Takeshi Fujita、 Distribuzione

sintattica dell' articolo indeterminativo in italiano e in francese、北海道大学文学研究科紀要、査読無、第140号、2013年、掲載決定

- ② Takeshi Fujita、 Considérations contrastives de l' article indéfini en français et en espagnol、北海道大学文学研究科紀要、査読無、第138号、2012年、pp. 31-62

- ③ 藤田 健、ロマンス諸語における定冠詞の代名詞的性質、北海道言語文化研究、査読有、第10号、2012年、pp. 7-22

- ④ 藤田 健、フランス語とスペイン語における不定冠詞の分布について、北海道言語文化研究、査読有、第9号、2011年、pp. 1-22

6. 研究組織

(1) 研究代表者

藤田 健 (FUJITA TAKESHI)

北海道大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：50292074